

巻頭言 風の時代に心を深く考える
黍稷農季人

Preface: Thinking deeply the Mind out in the Air Era
Kibikibi Noukijin

地の時代が終わり、2021 年からは風の時代が始まったと、占星術では言う。風の時代は目に見えないものに価値置く。すなわち、風は知性や情報を象徴している。物質より心に関心が向くようだ。自然とは何かという命題を探求してきて、自然観という心の中の自然という想念に行き当たり、心には夙に関心があつた。岩田慶治(1986)は心の中の自然こそ真の自然と言っており、ぼくの想念は大いに励まされて、ELF 環境学習過程という方法論を考えた。自然文化誌研究会の実践活動に支えられたこの理論は、さらに、S. ミズン(1996)の心の先史時代から啓発を受けて、心の構造を環境学習過程に反映させることにした。さらに、任意市民活動の実践において経験した人間の悪心を理解するために、M. スタウト(2005)やB. アマテウス(2008)の言う良心(あるいは教養、思い遣り、第七感)の未発達(退化進化)から心の構造に加えて機能に気付いた。この構造と機能を繋ぐのが認知流動性であるというところまで、実践理論が仮設できた。

しかし、人の心というものは、確かに風の様で、突然、向きを変える。当人でも認知、制御できない動きなのだろう。ましてや、他人にはその心変わりは全く理解が及ばない。とりわけ、人間の悪心の原である嫉妬、羨望や保身が関与しているのであるが、大方はそれを自ら自律することができない。認知流動性が良好に機能すれば第

七感により代償や浄化、昇華に至れば、思い遣りへと転化できる。

自然から乖離した都市暮らしをして、自然の中で生きる技と術を学ばず、現代文明が伝統的知識を忘却し、人間は生物的進化においてはもちろん、文化的進化からも定方向に退廃してきた。この国の生活様式は根本から修復がいる。里の衰退が里山の崩壊になり、野生動物の生活圏との緩衝地帯が無くなったので、里に出没、帰化動物は街に順化適応してきている。里を見捨てて、都市に集住、コンパクト・シティという趨勢は、中山間地の過疎高齢化、耕作放棄地や所有者不明土地を増やすばかりである。

ぼくたちは現象論(始めの一步)や実体論段階にとどまり、なかなか本質論にまで深く考えることをしない。ジャラルヴァンド(2022)は哲学について進化学はどう答えるかと考察を述べている。彼の論理の基盤となる古典哲学の豊かな知識はヨーロッパの大学の基礎学習過程によるのだろう。日本ではアジアの古典をほとんど学ぶことがない。日本の古典が『古事記』と『日本書紀』という神話ではなく、その古典哲学は中国の『論語』やインドの『ヴェーダ』などである。先師・先達の思索を一般教養として学ぶことが、自然に遊び、生業に勤しむと同時に、大事である。